



読書感想文コンクール特別大賞

小児病棟を読んで

3年 物質工学科 木村 早織

私がこの本を手にとったのは江川晴さんの作品だったからです。彼女は自ら看護婦としての経験を持ち、現代医療の現場で起きている様々な問題を追求するばかりではなく、人間とは何か、生きるとはどういう事なのか、幸せとは何なのかを読者に深く考えさせ、かつ感動も与える作品です。

この作品は題名通り「小児病棟」を舞台にしています。子供も大好きで医療にも関心がある私は、もし自分だったら...と思いながら読んでしまいます。

看護学校を卒業して2年の香山モモ子は看護婦としての自信を失くしてしまっていた老人ばかりの内科から、小児病棟勤務になったばかりです。彼女が出会ったのはまだ4歳で結腸狭窄のため産まれた頃から投与されていた薬の副作用のため後天的な嚥唾の哲也くんです。そのためわがままな態度をとっても言葉でしかる事は出来ないの体を使うことしかありません。しかし彼女は彼がどんな事をしても治療の苦しみや腸洗浄滌のために真っ赤に腫れたお尻を見ると我が儘にじっと耐える人が一人いても...と思ってしまう。しかし同僚に甘やかしているなど批判をされてもなお自らの看護への姿勢を変えず、真の医療を追求していきます。その姿は仕事としての作業ではなく一個人として彼と対等に向き合い、言葉では交わす事の出来ない「言葉」で体で、そして心で通じ合っていく様は憧れてしまいます。もし私だったら、出来るのでしょうか。そんな時、彼は何をしてもし叱らない彼女へいたづらをする。それは病気からきたものではなくただのいたづらです。そのため彼女は頭に來、彼は敏感に感じとり逃げるが、結局捕まってしまう。同じ病室のみんなは彼をばかにするでもなく、軽蔑するわけでもなく心配そうに2人を見つめる中、彼女は「心配かけてごめんなさい。もう大丈夫よ。」と頭を下げると彼は彼女の手を握り、深々とおじぎをしたのです。そこから彼はだんだんと変わっていきます...私はそこ

で涙がこぼれそうになってしまいました。耳が聞こえないのに、聞こえないからこそ、場の雰囲気などを四歳ながらにして感じとるのには驚きと、そして彼女の頑張りから感激も心からあふれてきてとめられなくなってしまいそうです。

私は五体満足な体で、入院した事もなく学校にも行け、色々な物や人に恵まれて生まれ、現在でもそれは続いています。医療関係者と知り合いなわけでもないのですが、前から医療には関心がありましたが、実際に重症の患者さんに会った事はありません。人は色々な形で産まれてきます。目がなかったり、手がなかったり...私はそんな子達を直視出来るのでしょうか。個人的な感情が混じってはいけないのでしょうか。可哀そうと思うのは相手に失礼な事なのでしょうか。私は嚥唾の人と会った事があります。私はどんな風に彼、彼女達を思っていたのでしょうか。私利私欲を越えた人間愛を私は実践できていません。私はそんな物語をかける、そして私利私欲を越えた人間愛を私生活で実践する江川晴さんは尊敬できる素晴らしい人だと思います。そして江川晴さんの作品を読む時、息を止めてドキドキしながら読みます。吸い込まれ、一度読み始めると途中で止める事が出来なくなります。複雑な人間の心をあのようにリアルにかけるのは看護婦として、人として様々な経験をし、苦勞もなされ、生きてこられたからだと思います。江川晴さんの作品は豊かな人生経験と人を愛する心と創造的な知的機能の統合の中から生まれてくるのでしょうか。

私は一歩でもこのような素晴らしい人に、女性になれたらと思います。

小児病棟
江川 晴
読売新聞社